

法然仏教学研究センター 2022年度全体研究会

〈第1回〉

日 時：2022年4月11日（月）

参加者：16名

- ・センター長あいさつ
- ・各班進捗状況発表

〈第2回〉

日 時：2022年5月30日（月）

参加者：17名

- ・研究発表

発表者：小川法道（当センター嘱託研究員・本学非常勤講師）

テーマ：善導における還相廻向の思想

要 旨：還相廻向の思想は、曇鸞に関しては多分に論じられているが、善導に関してはその限りではない。そこで五部九卷を精査した所、善導は還相廻向について、『往生礼讃』『観経疏』『法事讃』の著作の中で言及している。まず『往生礼讃』では還相廻向の思想を説くときに、「六神通」の語を用いている。これは三十卷『仏名経』の影響を受けたものである。次に『観経疏』では「大悲」の語を使用している。これは曇鸞『往生論註』ならびに世親『往生論』の影響を受けたものである。この二つの見解が出たことによって、その解釈の相違をめぐって、善導研究の中で問題となっている著作の前後について筆者の見解を述べている。最後になぜこのような相違が生じたのかについて、善導は『大智度論』の記述から「六神通」（『往生礼讃』）では不適切であると考え、「大悲」（『観経疏』）に表現を変更したと推測している。

- ・各班進捗状況発表

〈第3回〉

日 時：2022年10月3日（月）

参加者：13名

・研究発表

発表者：服部純啓（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所研究助手）

テーマ：『決定往生集』第五「修因決定」に見る相発心の解釈

要旨：『決定往生集』において菩提心に関する論述は、第五「修因決定」の二番目の項目である「別明菩提心」に見られる。そこでは、吉蔵『観経義疏』や慧遠『無量寿経義疏』等に基づき、菩提心が往生の正因だと位置付けている。珍海は、その正因となる菩提心を、『大乘義章』に説示される「相発心」として定義し、その中には「厭有為心」、「求無為心」、「度衆生心」という三つの心が含有しているとの理解を示している。

「別明菩提心」では、世俗常没の凡夫に「相発心」を対応させ、その最初の段階が凡夫の発す菩提心であると解釈する。その中、「相発心」に含有すると示す三種の心について珍海は、娑婆世界を厭い浄土を求めることを「厭有為心」と解釈するとともに、浄土を求めることがとりもなおさず、覚りを求めることであるとして「求無為心」にも対応させている。また、「度衆生心」に関しては願往生心と同一視する作願仏心に配当していることが明らかとなった。今後、より詳細な珍海の菩提心理解について検討を進めてゆく。

・各班進捗状況発表

〈第4回〉

日時：2022年11月25日（金）

参加者：13名

・研究発表

発表者：上野忠昭（当センター嘱託研究員・浄願寺副住職）

テーマ：聖光の見仏観

要旨：三昧発得は、それを目的として口称念仏を修するという法然のことばは残っておらず、不求自得の果報と位置づけたとされる。それに比して、浄土宗鎮西流二祖聖光の著述には、口称念仏は見仏を目的とするという文言が確かに散見する。『徹選択本願念仏集』下の冒頭には、念仏三昧は不離仏・値遇仏を意味するとある。仏に値うとは仏に見（まみ）えることであり、『大智度論』の文を引いて、仏に値うことの無量の利益を説き、どうして仏に見（まみ）えることを求めないでいようかと勧める。また、口称念仏の目的は見仏であると明言する。同じく聖光述『浄土宗

要集（西宗要）』においても同様の主張が、「第四專雜二修得失事」、「第十八般舟經自說往生事」「第四十九別時念仏事」「第五十八念仏三昧発得事」「第七十三念仏有五種増上縁事」に見られることを紹介した。続いて、『無量寿經』下およびその異訳に説かれる三輩と見仏の関係、善導『観經疏』に説かれる三縁と見仏の関係について触れ、最後に見仏と欣慕の関係について述べた。

- ・各班進捗状況発表

〈第5回〉

日 時：2023年1月27日（金）

参加者：18名

- ・研究発表

発表者：横田友教（当センター学術研究員）

テーマ：近世知恩院と黒谷金戒光明寺の御忌

要 旨：近世知恩院と黒谷における法然の御忌法要の実態について、黒谷『日鑑』の調査を踏まえ、現時点で判明したことを発表した。江戸中期の俳諧書によると、知恩院では御忌が盛大に勤められており、時折雪が降る寒い時期にも関わらず、人々は思い思いの華やかな格好で訪れ、音楽法要や境内の露店、見世物を楽しんだ。祭りのような賑わいで、「年始の壮観」と表現されるほどであった。一方金戒光明寺では、慶長十七年以前から末寺を出仕させて勤修していたことが「徳川家康御忌奉書」から確認でき、『洛東紫雲山黒谷金戒光明寺略記』によると四百五十回忌には四十八夜念仏が行われた。また現存する『日鑑』のうち、最初の御忌の記録は安永六年のもので、この年は火災により阿弥陀堂で実施されたが、法要自体はこれまで通り勤められ、京都や大阪などの門中寺院が導師を勤め、一月十八日の初夜法要に始まり毎日三座の法要が行われている。この期間中には江戸前期から続く一枚起請文の内拝や、参拝者と共に通夜別時が行われていた。

- ・各班進捗状況発表

以上